

# 日本ロシア文学会 関西支部 会報

発行 日本ロシア文学会関西支部事務局  
 住所 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町  
 京都大学大学院 人間・環境学研究科 ロシア語部会気付  
 電話 075-753-6533 Email hattori.vieuxslave@gmail.com  
 郵便振替口座 00960-2-48831 日本ロシア文学会関西支部

## ◎秋季総会・研究発表会の報告

2019年12月7日(土)、天理大学(柚之内キャンパス)において関西支部の秋季研究発表会ならびに総会が開催されました。

### 研究発表会

(1) 報告者: 中野悠希 氏

題目: ロシア語とポーランド語の前置詞句 y / u + 生格を用いた使役表現について

司会者: 岡本崇男 氏

(2) 報告者: 有田耕平 氏

題目: M. ゴーシェンコの創作における第三の実存—『アポロンとタマラ』と『恐ろしい夜』を中心に—

司会者: 前田 恵 氏

(3) 報告者: 塚本善也 氏

題目: 日露戦争と台湾—『台湾日日新報』を中心に

司会者: 大平陽一 氏

### 支部総会

1. 会員の異動(敬称略)

・入会: 有田耕平(関西/ソヴィエト文学)、

推薦者: 清水俊行、岡本崇男

ボリスワ・アンナ(関西/第二言語習得、

日本におけるロシア語教育)、

推薦者: 小田桐奈美、横井幸子

・支部変更: 塚田力(海上保安大に4月から)

北海道支部から

塚本善也(台北市、中國文化大學)

関東支部から

・退会者: 伊藤美和子、堀江新二

・会費滞納による退会: キリーロワ・エレーナ(会員)、  
扇エリザヴェータ(会友)

・支部会費の未納による資格停止・・・人見友章

2. 決算案と予算案の承認

資料に基づき事務局から説明があり異議無く承認された。

\* 予算案に関して。昨今の手数料の高騰にかんがみ、会費1000円から手数料を差し引いた金額を納入してもらったこととした。収入は同じで、支出(通信費)が増える。現状の繰越金も(多過ぎるくらい)多いので、当面は、問題が無い。今期分(2019年9月~2020年8月)から適用する。

3. 日本ロシア文学会関係の報告

10月の早稲田大学での全国大会が盛会であったことが報告された。また、来年の大阪大学での全国大会の開催日について、決定が当初の予定より遅れるであろうとの予測が伝えられた。

4. 2020年春季総会・研究発表会

6月7日(日曜日)に、神戸市外国語大学において開催される。

\* 2020年春季大会から、会友による研究発表も認める。大学院博士前期課程(修士課程)在籍中の大学院生に発表の場を提供し、その後の日本ロシア文学会入会への足掛かりとする狙いがあったの事である旨の補足説明もなされた。

大学院生以外の会友も同様に扱う。

### ◎日本ロシア文学会理事会報告

(12月21日開催)

2019年12月21日午後に東京大学本郷キャンパスで理事会が開かれました。重要な点をご報告します。

1)今年度の学会費の納入状況は、必ずしも順調ではありません。会費未納者が多かったために、学会の財政が危機に陥りかけていたことは、まだ記憶に新しいところです。関西支部の皆さんも、ぜひ早めの学会費納入をお願いいたします(年明けから督促が行われる由です)。

2)すでに全国学会ML等で事務局庶務会計からお知らせがありましたが、2019年10月に発行・配付された会員名簿に多くの記載ミスがあったことが判明しました。今後、業者側の負担で会員名簿の改訂版が郵送されます。その際、旧版は回収となりますので、同封の返信用封筒に入れて返送してください。

3)現在、学会賞にふさわしい書籍、論文の推薦を募集しています。〆切は2020年1月末です。詳しくは学会HPをご覧ください。

4)現在、学会HPへの情報掲載依頼フォームを記入して、事務局や広報委員会に送信しようとすると、せっかく書いた文面が消えてしまう等の不具合が頻発しています。広報委員会で原因と対策を検討していますが、支部会員の皆様にはご留意をお願いいたします。

5)博士後期課程在籍ないし同課程終了後5年以内の会員を代表者とする若手ワークショップ企画に対し、学会から最大10万円を助成するプロジェクトへの募集を、2020年3月31日〆切で行うことになりました。まもなく学会HPに募集要項が記載されますので、詳しくはそちらをご覧ください。

6)メールアドレスの変更等により、学会MLが届かなくなっているケースが、時々おきています。学会ML登録アドレス変更の場合は、広報委員会(pr@yaar.jpn.org)に届け出てください。

7)その他、会員の皆さまのご意見を伺いたい案件が2つございます。これにつきましては、関西支部のMLや春季総会などで、改めてお諮りしますので、ご回答どうぞよろしくお願いいたします。

### ◎次ページ以降に研究発表要旨を掲載 (発表者からの原稿をそのまま掲出)

## ロシア語とポーランド語の前置詞句 y/u+生格を用いた使役表現について

中野悠希 (京都大学大学院)

本報告では、ロシア語とポーランド語に共通して見られる次のような構文に注目した。

(1) a. Я стригусь у парикмахера.

b. Strzygę się u fryzjera.

「私は理髪師に髪を切ってもらう。」

例 (1) では動詞の表す動作を実際に行うのは主語で表される人物とは別の人物である。すなわち例 (1) は一種の使役表現と見ることができる。ここでは主語が使役者を、前置詞句 y/u+生格が被使役者を表している。本報告ではこのような使役表現を「サービスの使役」と呼ぶ。

サービスの使役における y/u+生格は動作主項と見なせるが、「～のもとで」というこの前置詞句の基本的な意味を考慮すれば、これは本来場所を表す付加詞であると考えられる。このことは先行研究でも言及されており、実際報告者がロシア語のコーパス (Национальный корпус русского языка) 及びポーランド語のコーパス (Narodowy Korpus Języka Polskiego) で採集した用例を調べたところ、両言語について、y/u+生格に場所 (「どこで?」) を表す表現と互換性があることが分かった。

一方先行研究では、サービスの使役における y/u+生格がどれほど動作主項らしい特徴を示すかは十分に検証されていない。報告者はコーパスの用例の調査と母語話者への聞き取りの結果を基に、動作主項らしい特徴として次の三つを指摘した。

①サービスの使役を表す動詞が移動動詞と結び付いた際、y/u+生格は目的地を表す x+与格/do+生格との競合で勝つことがある (例 (2))。動作主の解釈を強調する目的があると考えられる。

(2) a. Я хочу пойти у нее постричься.

b. Chcę pójść ostrzyć się u niej.

「私は彼女に髪を切ってもらいに行きたい。」

②y/u+生格は別の付加詞が表す場所の意味の

決定に関与しないことがある (ロシア語のみ)。ロシア語の例 (3a) では「家」の帰属について二通りの解釈があり得る。一方ポーランド語の例 (3b) では「家」は一義的に「理容師」のものとなる。

(3) a. Люди стригутся у мастеров на дому.

「人々は理容師に [人々の/理容師の] 家で髪を切ってもらう。」

b. Strzygę się u fryzjera w domu.

「私は理容師に家で髪を切ってもらう。」

③y/u+生格は動作様態を表す表現と結び付くことがある (ロシア語のみ)。ロシア語の例 (4a) では、「目を閉じ」ている人物について二通りの解釈があり得る。一方ポーランド語の例 (4b) では「目を閉じ」ているのは一義的に「あなた」と決まる。

(4) a. Это вы, наверное, бреетесь у парикмахера с закрытыми глазами.

「それはあなたが [目を閉じて/目を閉じた] 理容師に髪を剃らせているのでしょうか。」

b. Pan to się na pewno goli u fryzjera z zamkniętymi oczami.

「それはあなたが目を閉じて理容師に髪を剃らせているのでしょうか。」

このように、y/u+生格は場所の付加詞であると同時に動作主項らしい特徴も見せ、特にロシア語でその傾向が強いことが分かった。ロシア語には他にも «У нас с делами покончено» 「私たちは用事が済んだ」のように y+生格を意味上の動作主と見なせる構文があることから、動作主性を帯びることはロシア語の y+生格の特徴の一つであると考えられる。ただし先行研究で指摘されているように、「～に家を建てもらう」は строить дом у кого とは表現できないことから、サービスの使役における y+生格はサービスが提供される場所の概念との結び付きを依然強く保っていると言える。

ミハイル・ゾーシェンコの創作における第三の実存  
—『アポロンとタマーラ』と『恐ろしい夜』を中心に—

有田耕平(神戸市外国語大学 博士課程)

この度の秋季総会にて、筆者は物語集『センチメンタルな物語』に収録された小説『アポロンとタマーラ』、『恐ろしい夜』の読解を通して、ゾーシェンコが作品にて描いたジレンマやメランコリーを考察し、その精神状態から主人公が見出した「第三の実存」について報告した。

今回取り上げた作品である『アポロンとタマーラ』と『恐ろしい夜』は、革命によって存在意義を失った芸術家の主体とその実存の問題が物語の主題を成している。『アポロンとタマーラ』では、革命後の社会、ひいては結婚相手に見限られた元ティパーの主人公は、人間とは肉と骨で出来た被造物であると悟り、自殺しようとする。しかし、主人公は通りすがりの狙撃兵に自殺を止められ、墓守の仕事に宛がわれる。墓守になった主人公は、生と死、過去と未来、ロシアとソヴィエトの狭間としての墓地という「例外状態」に囚われてしまい、「剥き出しの生」と化してしまう。こうした被造物の実存、人間の自由な主体を行使できない状態こそ、ゾーシェンコの考えるジレンマやメランコリーである。その問題は『恐ろしい夜』でも継承されるが、新たな展開を見せている。トライアングル奏者である主人公は、習字教師から「本日、習字が中止になりました。明日は美術が中止です」という実体験に基づく教訓を聞かされたことで、永劫回帰する世界に対する実存的不安を覚える。自由な主体を確立できないニヒリズムの世界を理解した主人公は、街角に立ち、町行く人々にお金を恵んでほしいと話しかけ始める。自身の実存的不安を解消するために、主人公は『外套』のアカキー・アカキーエヴィッチのような「小さな人間」となることで自身と社会を同一化させようとしているのだ。しかし、人々から主人公は酔っ払いであると決めつけられ、警察に追い回されてしまう。主人公は教会に逃げ込み、鐘を夜の町に響かし、その場で警察に捕まる。けれども、次の日、主人公の顔には事件以前にはなかった皺が刻まれる。この皺は所与的実存としての身体に刻まれた主人公の個人的な歴史であり、永劫回帰の世界から脱した人間の新たな主体の具現化である。

ゾーシェンコは革命時代における芸術家やインテリの主体性の喪失を「センチメンタルな物語」として描いた。一方で、ゾーシェンコは被造物としての人間が本来持っている所与的実存、ロシアやソヴィエトの歴史に回収されない個人の自由な主体を形成するための「第三の実存」も発見した。この「第三の実存」にこそ、ロシアからソヴィエトへと生成する実体なき国家に囚われた人間のジレンマやメランコリーを解消する糸口となるとゾーシェンコは考えていたのではないだろうか。

## 日露戦争と台湾—『台湾日日新報』を中心に

中国文化大学 塚本善也

周知のとおり、日露戦争関連の研究は日ロ双方で膨大にあり、今なお新たな資料や視点で検討されている。また戦場となった中国や韓国でも継続して研究されていると聞く。では、当時すでに日本領土であり、いわば戦争当事国だった台湾ではどうか。管見のかぎり、台湾での日露戦争研究は盛んとはいいがたいように思われる。それはやはり戦禍を免れたために、対岸の火事のように実感に乏しいからであろうが、それ以外の植民地期の研究が熱心に行われているのを鑑みると、むしろ関心は低すぎるとさえ感じずにおれない。

実際には、日露戦争は直接、間接に台湾に影響せずにはすまなかった。たとえば、台湾初の国勢調査は戦時中に着々と準備され、戦後すぐに実行された。また清朝期以来の土地所有制度を解体した「大租権整理令」の発布も、金本位制へ転換する幣制改革の実施も戦時下であった。厳密には、これらは戦前から論議されており、日露戦争が直接の契機だったわけではない。しかし、多くの流言飛語、社会的混乱や不安を招くことは火を見るよりも明らかだったにもかかわらず、総督府はあえてその時期に実行したのである。機に乗じて行われた節もかなり強うかがわれ、戦争の間接的な影響は否定できない。

直接の影響では、中国や韓国を始めアジア諸国に波及した革命運動、民族運動があげられる。台湾の抗日闘争も日露戦争と切り離して考えられない。事実、当時の『日日』を繰ってみると、原住民族への討伐行動が頻繁にあったことがわかるし、漢民族の大規模な武力蜂起は日露戦後に続発するのである。

このように「日露戦争と台湾」というテーマは様々な検討に値する課題を内包する。もちろん、国勢調査にしろ民族運動にしろ、個別研究の蓄積はある。しかし、それらを「日露戦争と台湾」の枠組みで考察するなら、何か従前には気づかなかった視覚が開かれるのではないか。台湾にとって日露戦争は何を意味するのか、日ロや中韓にとっての日露戦争と何が、どう違うのか等々、新たな課題が浮かび上がってくるのではないか。

本報告はこうした前提に立っているが、もとより限られた時間であり、課題を次の点にしぼった。戦前台湾で最大部数、最長発行期間(ほぼ半世紀)を誇った日刊紙『台湾日日新報』(以下『日日』)を主要材料に、台湾において日露戦争はどう伝えられたのか、ロシアおよびロシア人はどう表象されたのか。

台湾にとってロシアはまるで縁遠い存在だった。そのためそれが突然敵国となって立ち現われても、台湾人の反応が四分五裂となっても当然だった。当局が特に警戒したのは漢民族の反日行動が原住民族に波及することだった。そこで民情の安定と社会不安の払しょくが総督府の最重要課題で、当初から戦況の詳細な報道は制限された。だが、その一方で、『日日』はそれとは反対のこゝろを行ふ必要もあった。すなわち、ロシア(人)を敵国(人)として前面に打ち出すことである。そうした姿勢の一つの現われが、戦争を詩歌、俳句、俗謡、漢詩文等で詠じた「日露戦争文学」欄で

ある。そこでは容赦ない攻撃、非難の言辞が踊っている。しかし、それらを一見して感じるのはいわゆる「ロシアっぽさ」のなさである。歌の多くは本歌取りであったり、イメージ、定型語(句)の組み合わせからできていて、作者らがロシアについて大して知らなかったことがわかる。

また紙面を追っていくと、ストレートな強い言葉や記事ばかりではないことに容易に気づく。従来の研究では、ニコライ二世を頂点とした宮廷政府=悪、ロシアの民衆=善とする言説が日本のメディアで流布したとされる。本報告は、そうした図式的な善悪のカテゴリーではなく、「巷の噂」とされるものに着目し、仮に二種に分類してみた。

一つはロシア(人)を戯画的に揶揄するのだが、その結果、はからずも戦争自体を脱力させているもの。例えば、ロシア人の迷信深さを憐れみつつ笑いにした記事は、何かユーモラスな印象をあたえ、そのため敵意を持つことのばからしきすら感じさせる。もう一つはロシア人を理解可能な人格のように扱ったもので、捕虜となったロシア兵が熱心に日本語学習に勤しんだという類いの記事である。前者がイメージや俗説(「ロシア人とはなべてかくかくしかじかである」)にもとづくとする、後者は現実にロシア人と関わりを持ったからこそ、ありえた知見である。この種のもは、ロシア人捕虜が増えるにつれ、また日本の優勢がはっきりしてきた段階、特に1905年に入ると目立ってくるように思われる。

台湾ではバルチック艦隊の接近が予想され、最大級の警戒態勢が敷かれた。しかし、『日日』の以上の記事から感じられるのは、敵国への憎しみというより、敵意にも至らない、どこか漠としたロシア像である。その意味では、日露戦争は台湾がロシアと向き合う契機にはならなかったといえる。しかし、戦争の影響は戦後に別の形でやって来る。先の国勢調査の他に、纏足廃止、阿片取締、犯罪者や障がい者の管理矯正といった、いわゆる台湾の「日本化」策であるが、これらについては別の報告機会に譲らざるを得なかった。